

中国古代の世論調査——采詩制度

高歌今「我国古代民意調査——采詩制度」（統計研究一九八四年第一期）

世論調査の歴史を論じる際には、まずアメリカから説き起すのが一般的である。アメリカでは、早くも十九世紀の七、八十年代から *The Atlantic Monthly* や *The North American Review* などの雑誌が世論調査を開始し、主に社会の暗黒面に光を当てた。二十世紀前後には、世論調査は政治意識調査へと発展する。*The New York Herald* 紙などは、模擬投票によって有権者の候補者に対する反応を予測した。一九三五年以降は、ジョージ・ギャラップが率いるアメリカ世論調査所が調査内容を大幅に拡充し、有権者の候補者に対する反応だけでなく、立法やその他政府の政策に対する意識も調査するようになった。今日ではギャラップ調査は世論調査の同義語となっている。

しかし、忘れてならないのは、古代の中国においても世論調査は重視され、実施されたばかり

「ジョージ・ギャラップ (George Horace Gallup 一九〇一〜八四) 一九三五年にアメリカ世論調査所 American Institute of Public Opinion を設立した世論調査界の中心人物。三十六年のアメリカ大統領選挙において、ある有力雑誌が二〇〇万人のアンケートをもとにルーズベルトの落選を予測したのに対し、わずか二〇〇〇人を対象とした調査からルーズベルトの当選を予測・的中させ、少数であっても適切なサンプリングが行われれば母集団の特性が把握できることを実証した。」

でなく、そのための調査制度が設けられていたことである。それがすなわち周代と漢代の采詩制度である。

周代の采詩制度については、古籍の中につぎのような記載がある。『礼記』王制には、

天子は五年に一巡守し……大師に命じて師を陳せしめ、以って民風を觀る。

『漢書』食貨志には、

春秋の月……行人は木鐸を振るいて路を徇り、詩を採りてこれを大師に獻げ、（大師は）

その音律を比べて、以って天子に聞ず。

『漢書』芸文志には、

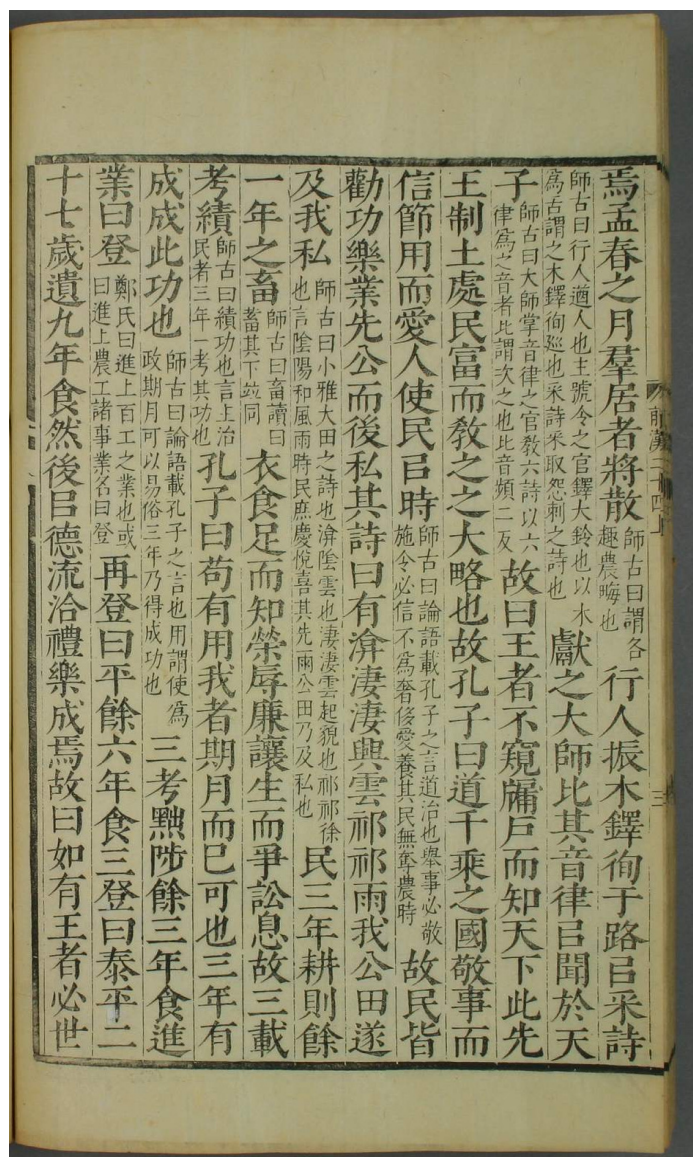
故に古に采詩の官あり。王者の風俗を觀、得失を知り、自らを考正する所以なり。

とある。

大意は次のとおりである。周の天子は五年ごとに鎬京を出発して東に巡幸し、諸侯国を視察した。各国に到着すると、大師に命じて収集した民歌を上聞させた。また、各諸侯国には民歌を専門に収集する「行人」という官が設けられ、毎年春と秋の二回、民歌の収集に出かけた。道中、木鐸を鳴らしながら行くが、これは民衆に采詩の官が来たことを知らせ、詩歌を献上させるためであった。彼らが集めた詩歌は、楽官の「大師」のもとに送られ、それに曲をつけて周の天子の前で歌われた。

周代の采詩についての説は漢代に始まり、内容も一樣でないため、真偽を疑う者もいる。清の崔述は「後人の臆度に出ず（後代の人の憶測から出たもの）」と述べている。（読風偶識・通論十

三国風）しかし、多くの研究者は周代の采詩制度には信憑性があると考えている。その主な理由は、西周末から春秋戦国時代にかけて、多くの者がすでに「風俗を觀、得失を知る」ことの重要



漢書食貨志上

性を理解していたことである。『国語』や『管子』、『商君書』などは、国家が法令を制定する際には民俗や民情に従うべきこと、そして民俗や民情を理解するためには、さまざまな形式での調査が必要であることを強調している。

また、もう一つの理由は、『詩経』三百篇の時間的・空間的な広がりが広大であることである。時間についていえば、そこには西周初めから春秋時代中ごろまでの五百年に及ぶ複雑な社会状況が反映されている。空間についていえば、十五国風だけでも現在の陝西、山西、山東、河南、湖北などの省の全域あるいは一部が含まれている。当時の歴史的条件下で、もし一定の制度もなく、詩歌の計画的な収集が行われていなかったとすれば、このように網羅的で内容豊かな詩集を編み出すことは不可能であつたらう。

一方、漢代の采詩制度については、古籍の中に次のように記されている。『漢書』礼楽志は、武帝が郊祀の礼を定めるに至り（中略）すなわち楽府を立て、詩を采りて夜誦す。趙・代・秦・楚の謳あり。李延年を以つて協律都尉となす。

『漢書』芸文志は、

孝武帝より楽府を立て歌謡を采る。ここにおいて代・趙の謳、秦・楚の風あり。みな哀楽に感じ、事に縁つて発す。また以つて風俗を觀、薄厚を知るべしという。

大意をいえば、漢の武帝の時代から「楽府」という機関が設置され、民間歌謡の収集が始まった。こうした民歌を通して、「風俗を觀、薄厚を知る」ことができたというのである。

漢代の采詩制度については疑いをもつ者はいない。それは正史に記載されているばかりでなく、

『樂府』という詩集も存在するからである。『漢書』礼楽志によれば、樂府という機関の組織はかなり龐大で、最盛期には職員数が八二九人に達したという。

『詩経』と『樂府』、とくにその民歌の部分は、作られた時代は異なっても、みな労働大衆の反動政治に対する不満を訴えている。たとえば、階級的な圧迫や搾取の悲惨さ、戦争・徭役が民衆に与えた苦しみなど。いわば詩歌の形式を借りて民意を訴えたのである。一方、統治階級がなぜ采詩を行ったかといえ、それは礼楽を定めて太平に色取りを添え、宮廷の娯楽に供するためであったが、それ以外にも政治的な目的があった。それは「風俗を觀」ることで「得失を知り」、「自らを考正する」。今日の言葉でいえば、民意を理解することで、柔軟な政策決定を行い、統治をより強固なものにしようとしたのである。

中国古代の采詩制度と今日の世論調査の最大の相違点は、前者が形象的思惟によって民意を反映させ、かつ形象的思惟の分析方法によって民意を理解したのに対し、後者は論理的思惟——主にイエスかノーか、賛成か反対かといった判断——によって民意を反映させ、かつ論理的思惟の分析方法によって民意を理解する点にある。しかし、両者の目的とするところは、基本的には同じである。